令和６年４月１７日

公益財団法人富山第一銀行奨学財団
理事長　横田　格　殿

助成研究成果概要報告書

教育機関名　：富山国際大学		助成金額　：　400 千円	
研究代表者　：豊岡　理人	所属　：現代社会学部		職位　：准教授
研究題目　：ある中山間地域の情報を集約するＷｅｂサイトを通じた地域活性化の要因の探索			

研究概要

本研究は、中山間地域におけるウェブサイトや SNS を通じた様々な情報発信から新規の地域魅力発見につながる要素の抽出が可能か試行したものである。中山間地域は過疎化が大きく進行し、関係人口増加は地域の持続可能性にとって重要な課題である。しかし、これらの地域では人的資源不足を原因とするウェブサイト等での情報発信不足や情報の提供と需要との間にミスマッチが生じている可能性がある。そこで、本研究では、富山県の特定の地域を対象に、画像や動画を含む豊富な地域情報を提供するウェブサイトを開発し、ウェブサイトのログデータを分析することで、効果的なコンテンツを特定し、中山間地域の魅力を高めることを目指す。さらに、本研究は地域住民が情報を更新できる仕組みを導入し、地域の魅力発見をデータ駆動型のアプローチで実現することを試みている。この取り組みは、地域外の人々に地域の魅力を伝えるとともに、他の中山間地域における関係人口増加に寄与する可能性があり、地域社会の持続的な発展に貢献するものと期待される。

成果要約

研究対象の中山間地域としては、富山県富山市の小見、本宮、有峰、粟巣野の各地区とした。情報発信はプル型(閲覧者が情報を能動的に取りに行く)メディアとして、独自ウェブサイトおよび Facebook を開設した。また、プッシュ型（閲覧者が情報を受動的に受け取る）メディアとして、X(旧 Twitter), Instagram を中心に、YouTube、TikTok のアカウントも作成・運用した。投稿期間は 2023 年 8 月～2024 年 3 月まで行い写真および動画を定期的に投稿した。Twitter については定期的にタグ情報をつけて投稿していたことがボット投稿（機械による投稿）と見なされ、2024 年 1 月にアカウントが凍結された。また、YouTube の動画作成や TikTok の音楽の付与など作業時間が掛かるメディアは投稿を無くし、主に、独自ウェブサイト、Facebook、X、Instagram で投稿作業を実施した。また、Facebook および Instagram では、日本語に加えて英語とベトナム語でも同時に情報発信した。

結果であるが、視聴回数の観点からはどのメディアも視聴回数が非常に少なく傾向を図るには取得データが足りないと言わざるを得なかった。最も視聴回数が少なかったメディアはプル型メディアである独自ウェブサイトおよび Facebook であり、ほぼ視聴・ブラウズされなかったといって良い。プッシュ型メディアのアカウント(X、Instagram 等)にこれらメディアへの URL リンクを付与し導線を作成したことも全く奏功しなかった。一方で、最も視聴回数が多かったコンテンツは X への投稿であり、視聴回数が 10 回程度の非常に少ないものもあるが 250 回程度視聴されるものが散見された。また、X ではこのポストされた内容に対して何らかのアクションを取った数として Engagement 数という指標があるが、250 回程度視聴された投稿であっても Engagement 数は 5 以下であることがほとんどであり、視聴されてもアクションが取られることは少なかったことを示している。一方、Instagram はある投稿がリーチしたユーザー数は 20 人前後であるがプロフィール画面にアクセスしたり、プロフィール欄にのせたリンクをクリックした数は 5 人ほどおり、X と比較してプロフィール欄へ誘導できる確率が高いメディアであることが分かった。

次に、コンテンツ内容から新しい観光の要素を抽出する可能性についてであるが、コンテンツ内容が自然や景色に偏り、その投稿内容に多様性を持たせることが出来なかった。この低い多様性の原因は、動画投稿者である私の地域への理解不足であり、また、地域の発信に対して責任を委託された立場でなかったにあると考え

ている。前者については、当該地域にある民俗研究会の会誌を収集し、その内容を発信したり、地域のイベントに参加することで宣伝する材料を増加させられると考えている。後者については、地元住人でない立場から投稿する際にネガティブな情報(潰れた廃屋や老朽化し半壊したホテル、雪の少ないスキー場、動物に荒らされたゴミなど)を発信することが出来ず、そのネガティブな情報に魅力を感じる人へのリーチが出来なかった。また、研究初期に地元住人に説明会を 2 回実施し協力を要請したが、地元住民でも情報発信の必要性を感じる人と感じない人と二層に分かれていた。必要性を感じる人へアプローチも試みたが、必要性を感じる人は総じて若い年齢層であるため定職および子育てなどもあり、協力する意思はあるが時間がないといった傾向が見られ、地域おこし協力隊のような宣伝を専業とする役割の必要性を感じた（なお、当該地域は昨年度地域おこし協力隊を募集したが応募者が現れなかった)。今後は、地域住民への理解促進を図りながら発信を続け、当該地域の新たな魅力発見につなげたい。

研究成果発表状況	雑誌論文、学会発表、図書、新聞掲載、作成 Web ページ、特許権等の出願・取得状況		
	なし		
経費の執行状況	区　分	執行額(円)	備　考
	物品費等	400,000	Google One(2TB プラン)等

令和６年４月 17 日

公益財団法人富山第一銀行奨学財団
理事長　横田　格　殿

助成研究成果概要報告書

教育機関名　：富山国際大学		助成金額　：　700 千円
研究代表者　：高橋　ゆかり	所属　：現代社会学部	職位　：教授
研究題目　：保育施設における室内外空気中微生物の遺伝子解析		

研究概要

幼児が昼間の大半を過ごす保育施設において、室内外空気中の細菌および真菌の種類を明らかにすること、特に幼児への健康影響が懸念される微生物の種類を特定することやその発生源を明らかにしていくこと、検出された微生物と室内の使用状況との関連を明らかにしていくことを目的として研究を行った。

室内外空気試料は、夏季（7 月）と冬季（12 月）の 2 回、富山市内の 3 か所の保育施設において、1 施設あたり保育室 2 室と屋外の計 3 か所で採取した。採取装置には、フィルターを装着したエアポンプ（MP-Σ300N Ⅱ、柴田科学）を用いて、3 L/ min で 24 時間試料を採取した（積算流量 4.32 m^3）。同時に、室内の気温、湿度および換気状況を把握するための二酸化炭素濃度を、データロガ（MCH-383SD、マザーツール）を用いて測定した。また、部屋の使用状況についても調査した。採取した空気試料から FastDNA SPIN Kit for Soil（MP Biomedicals）を用いて DNA 抽出を行った。これらの抽出 DNA について、細菌の 16S rRNA 遺伝子と真核生物の 18S rRNA 遺伝子を標的とした PCR 増幅後に、次世代シークエンサー（Illumina MiSeq）と解析ソフトウェア QIIME を用いた菌叢の網羅的解析を行った。

成果要約

室内空気中の細菌群集構造を解析した結果、門レベルでは、Proteobacteria 門、Firmicutes 門、Actinobacteriota 門、Fusobacteriota 門が優占しており、これらはすべての室内試料から検出された。3 園とも、夏季には Proteobacteria 門の割合が高くなる傾向が見られた。網レベルでは、Gammaproteobacteria 網、Bacilli 網、Alphaproteobacteria 網などが優占していた。室内と屋外の結果を比較すると、室内外の両方の試料から検出された細菌もあったが、室内試料からはヒトの常在菌も認められ、室内空気中には屋外から流入した細菌とヒト由来の細菌の両方が存在していることがわかった。本研究で対象とした 3 園について、夏季と冬季の細菌類の結果を比較すると、季節によって群衆構造が異なっており、冬季の方が多様性が高い傾向が見られた。

室内空気中の真核生物を解析した結果、門レベルでは、Basidiomycota 門が優占しており、夏季の室内試料の 81.6%以上、冬季の室内試料の 69.6%以上が Basidiomycota 門の真核生物であった。網レベルでは、Agaricomycetes 網が優占しており、夏季は 71.5～87.2%、冬季は 61.8%～71.9%であった。真核生物は、屋外と室内で似たような傾向を示したことから、室内から検出された真核生物は、屋外から流入するものが多いと考えられた。本研究で対象とした 3 園について、夏季と冬季の真核生物の結果を比較すると、冬季の方が若干多様性が高い傾向が見られたものの、細菌類ほどの差は見られなかった。また、真核生物も季節によって群衆構造が異なっていた。

研究成果発表状況	雑誌論文、学会発表、図書、新聞掲載、作成 Web ページ、特許権等の出願・取得状況		
	今後、学会発表、論文投稿を行う予定である。		
経費の執行状況	区　分	執行額（円）	備　考
	【物品費】 試料採取用ポンプ，充電器 実験用消耗品一式 DNA 抽出キット、プライマー 【分析委託費】 菌叢解析の分析委託費 【謝金】 協力施設への謝金	 161,227 64,923 61,050 382,800 30,000	
	合計	700,000	

令和 6 年 4 月 22 日

公益財団法人富山第一銀行奨学財団
理事長　横田　格　殿

助成研究成果概要報告書

教育機関名　：富山国際大学		助成金額　：　300 千円	
研究代表者　：M. フランク	所属　：現代社会学部	職位　：准教授	
研究題目　：富山の地域文化を伝えるための日本語と英語の比較修辞学研究			

研究概要

本研究は、富山県の魅力を新たな形の英語で表現することを目的とした、英語コンテンツの開発に関する実践的かつ探索的な研究です。 直接翻訳や AI を避けて乗り越えて、言語の人間的および文化的側面と、読者のニーズと期待に焦点を当てる。 既存の日本語の資料を英語に直訳するのではなく、職人文化などを含めて文化的ルーツを再評価し、新しい種類の英語でその感情を表現することに目指す。

この研究を通じて、英語と日本語の関係を異文化間および比較修辞学の観点から再検討することで得られた知識を使用する。その結果は、インバウンド観光客や英語を話す長期居住者が使用するための印刷物と電子資料の両方を生成することに使用される。 また、直接富山県を訪れることはないが、富山県の商品を使ったり、富山の文化を学んだりする英語話者にも、富山県の魅力をアピールすることができる。 富山の独自の文化や商品を英語で効果的に表現するために、資料を作成するシステムを構築することを目的としている。

①研究課題の学術的重要性（国内外の関連する研究の中で当該研究の位置づけ等）

地域文化を学術的言語調査の対象とすることで、この研究は大学と地域社会との新たなつながりを提供することができる。 さらに、この研究は、コミュニティと大学が協力して新しい英語調査方法を作成するユニークな機会になる。

研究の結果は、大学の英語と異文化コミュニケーション科目の教材とカリキュラムを決定するために使用可能性が高い。これは学術的にも萌芽的なテーマであり、本研究で得られた成果は、今後、富山県や日本の英語教育や異文化コミュニケーション研究に貢献することが期待される。

②研究課題の独創性

①については、学内における英語教材の作成と、今後の持続可能なコミュニティ形成の契機となる大学外への文化・観光資源の開発・普及を組み合わせた先行研究や事例はほとんど見られず、その点に本研究の独自性がある。本研究では学生をコミュニティに参加させるところから、現地でのフィールドワークと異文化言語学習を組み合わせることを目指す。

③研究課題の波及効果

主に以下の2点が挙げられる。 一つ目は、進行中の参加型プロジェクトとして、富山県の文化を新しい様式の英語で表現するためのコミュニケーション環境の整備であり、学生と地域の人々が相互に有意義な交流に参加できる。

もう一つは、研究論文、観光およびその他の宣伝資料、教育資料を積極的かつ継続的に作成できる、他県・地域のモデルにもなり得る富山文化に関するバイリンガル リソースのデータベースを開発する。この活動により、富山県の振興・富山の英語教育水準の向上を実現できる。

④研究課題の地域性（富山県の活性化等への貢献を含む。）

この3年間、富山国際大学では本研究の申請者を中心にオリジナルブランド酒造りプロジェクトが続けられてきた。このプロジェクトの目的の一つは、大学生の視点から日本酒を外国人にアピールすることで、日本人学生と留学生が一緒に活動する中で、富山文化の特徴を表現するためには、新しい種類の英語が必要であることが明らかになった。

また、富山県酒造組合の紹介で昨年は申請者の専門演習の学生と一緒に富山県内の12の酒蔵を訪問し、インタビューを行った。 これらの取材資料から、学生たちは本格的な英語資料の作成に取り組み始めった。

新しい「英語」を創造するには、既存の日本語資料を翻訳するだけでなく、文化（言葉）の源から出発しながら英語話者のニーズを再考する必要がある。

成果要約

この助成金の申請に関連する研究方法について、

（1）学生たちは富山県の 12 件の酒蔵でインタビューを実施し、クラスでデータを分析した。また、有機農業に従事する農家や富山県庁の国際観光関連の部署にもインタビューを行った。このデータから、県外の酒米と県産の酒米への焦点や、新製品の導入と地元の顧客向けの伝統的な味の保持という議論など、日本の酒産業に関する既存の印刷資料では触れられていない富山の酒造りのいくつかのポイントが明らかになった。これらのトピックは、日本酒の国際ファンにとって興味深いものであり、訪日外国人観光客の言語に翻訳することで、富山の地酒への関心と参加を増加させることができる。さらに、文化的および言語的な障壁を超える日本の酒蔵の美しさがこの研究で強調された。写真のコレクションや音声記録もデータベースとして収集されている。

（2）英語圏の協定校との調査が開発され、いくつかの調査は完了した（他の結果は保留中）。富山国際大学の留学帰りの学生も、異文化間の修辞戦略を使って卒業論文の研究を行っている。特に、英語のドラマが日本語に翻訳される際に、文化的要素の保存度に関する研究が続けられている。

（3）現在、1（および部分的に 2）の結果に基づいてデータベースが組み立てられており、これにより(a) 富山の文化の異文化間プロモーションのための資料および(b) 富山の学生が異文化コミュニケーション分野で使う教育資料が開発される予定。

COVID 以前の数値に戻り、それを上回る国際訪問者の数が富山に戻ってきたため、英語での異文化コミュニケーションおよび地元魅力の新しいアプローチの必要性がそれに応じて増加している。翻訳アプリや AI リソースが基本的なサポートを提供することはできるが、日本の伝統文化に根ざしつつ、訪日外国人および国際的な観客にターゲットを絞った新しい言語モデルの必要性がますます明らかになっている。この研究の結果とその意味合いがこれを示している。

研究成果発表状況	雑誌論文、学会発表、図書、新聞掲載、作成 Web ページ、特許権等の出願・取得状況		
	11 月 27 日　JALT（Japanese Association of Language Teachers）学会発表 12 月 20 日　北日本新聞　学生の活動についての記事 現在　　この研究についての論文を作成中		
経費の執行状況	区　分	執行額(円)	備　考
	物品費　他	300,000	

令和 6 年 4 月 15 日

公益財団法人富山第一銀行奨学財団

理事長　横田　格　殿

助成研究成果概要報告書

教育機関名　：　富山国際大学		助成金額　：　300　千円	
研究代表者　：　相山　馨	所属　：　子ども育成学部	職位　：　教授	
研究題目　：　ケアマネジメント実践におけるヤングケアラー支援の検討			

研究概要

わが国の要介護高齢者数は、今後急速に増加していくことが見込まれている。2000 年の介護保険制度の導入により介護の「社会化」が進んだものの、その一方で在院日数の短縮化や在宅医療が推進され、「老々介護」や「認認介護」、生産年齢者の介護離職の増加等、介護をめぐる課題が顕在化している。また、疾病の慢性化・複雑化による高齢者以外の要介護者も増加傾向にあり、これまで介護には無縁であった人が介護を担うようになった。従来、家族介護の担い手は配偶者や子、子の配偶者等の大人との認識がされてきた。しかし近年、家族の介護を担っているヤングケアラーの存在が指摘されるようになった。もちろん、ヤングケアラーが存在する根本原因として要介護者の増加があげられるが、その背景には、世帯構造の変化やひとり親家庭の増加による家庭自体の介護力の低下がある。家族のケアが必要になった時に、ケアの役割を子どもが担うことでなんとか家族機能を維持することが可能になっているのである。しかし、ヤングケアラーの問題は子ども自身の成長・発達、学びへの影響だけでなく、本来、護られるべき「子どもの権利」の視点からも危惧されており、次世代を担う子どもたちが必要な支援を受けて、健康的な生活が送れるようにしていくことが重要である。

わが国では 2000 年頃よりヤングケアラー研究がはじまり、2010 年以降に心理や教育、福祉、介護、看護の分野で調査研究がされ、存在割合やケア対象、ケア内容、当事者の認識等が明らかにされつつある。最近はメディアによってもヤングケアラー自身の体験談や NPO の支援の取組が紹介されるなど、ヤングケアラーに対する関心が高まっている。また、第 9 期介護保険事業（支援）計画の基本指針（厚生労働省 2024.7）においても、ヤングケアラー支援が位置づけられ、介護負担の軽減や関係機関との連携が求められるようになった。しかし、その支援の重要性が強調されながらも現在は実践につながる議論が進んでいるとはいえない。そこで、本研究では、ヤングケアラーがケアをしている対象者の担当介護支援専門員の実践を通して、ケアマネジメントを活用した効果的なヤングケアラー支援の方法について検討する。

成果要約

介護支援専門員のケアマネジメント実践における効果的なヤングケアラー支援を明確化するために、ケア対象者（利用者）の支援過程においてヤングケアラーに関わったことがある介護支援専門員 6 名を対象にヒアリングを実施し、ケアマネジメントプロセスの「アセスメント」、「支援計画の立案」、「支援の実施」の各局面におけるヤングケアラーへの支援内容や具体的な方法の分析を行った。分析は、経験年数 5 年以上の主任介護支援専門員（スーパーバイザー）６名により実施した。その結果、まず「アセスメント」の局面においては、ヤングケアラーとの関係構築に努めるとともに、ヤングケアラーから話があった時には、その話を聴き、寄り添う支援を行っていた。また、ヤングケアラーを個別に捉え、年齢や性格、ストレングス（好きなこと、得意なこと、興味・関心があること）を把握するとともに、ヤングケアラー自身の課題（障害の有無、登校状況、虐待等の支援を必要とする対象かどうか）やヤングケアラーが担っているケアの内容とそれに対する負担度や負担感、ヤングケアラーがケアを担うことによって抱えている課題をキャッチし、その要因の分析を行っていた。さらに、ヤングケアラーとその他の家族との関係性、ヤングケアラー自身のケアに対する思い（あたり前になっていないか、やりたくないが仕方なくやっているか、やらされているか等）を把握し、ヤングケアラーの置

かれている状況や周囲との関係やつながりの把握に努めていた。「ケアプランの立案」の局面では、まず、ヤングケアラーの個別の状況に合わせてヤングケアラーが担っているケアをケア対象者のケアプランに位置づけている場合と、位置づけることによってヤングケアラーがケアを実施しなければならなくなることから、あえて位置づけていない場合とがあった。また、ヤングケアラーへの支援としては、主にヤングケアラーの介護負担軽減を目的としたサービス（配食サービス、訪問介護、訪問看護、通所介護、福用具貸与、居宅療養管理指導）を導入したり、ヤングケアラーやその他の家族のレスパイトを目的に、短期入所やレスパイト入院を導入したりとケアに関する内容があげられていた。ヤングケアラー自身の課題に対する支援はケア対象者の家族支援の一つとして、関わる関係者間で認識を共有し、対応していた。

「支援の実施」の局面では、3 つの手立てによって支援が行われていた。まず、「介護支援専門員によるヤングケアラーへの個別支援」である。介護支援専門員は、ヤングケアラーの状況を把握し、信頼関係をつくり、それを大切にしながら、そのヤングケアラーに合った個別の関わり方で対応し、困ったことが生じたらすぐに連絡できるように携帯電話の番号を伝えたり、ラインを活用したりしてサポートしていた。次に「多職種・多機関連携によるチームアプローチ」があげられる。ケア対象者に関わる多職種がヤングケアラーの状況を理解して同じ方向性をもって対応できるように関わり方を共有したり、支援する上で連携したりとケアマネジメントにおけるチームを生かした支援が行われていた。また、学校や市町村担当部署、経済的支援を提供できる機関につなぐとともに、多機関連携により、ヤングケアラーが困った時に緊急対応できるようにするなど、個別の支援体制をつくる支援も行われていた。そして、「家族システムに着目した支援」としては、ヤングケアラーとケア対象者、その他の家族間のつながりや関係性を捉えて支援していることがあげられる。父母や祖母などへの遠慮から家族に相談できない状況があるケースでは、子どもが相談できるように調整したり、家族間のストレスを理解しバランスをとりながら支援したりと、家族のつながりを考慮した対応が行われていた。

このような支援が展開された結果、ヤングケアラーの介護負担が軽減した、ヤングケアラーの体調が整った、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーにつながり学校で居場所ができた、ヤングケアラーが市町村の担当者に自分から相談できるようになった、不登校が解消されて登校できるようになったといった「ヤングケアラーの変化」が生じており、介護支援専門員による支援の効果が見受けられた。さらに、介護支援専門員の支援の視点を捉えるために、介護支援専門員ごとに支援内容を分析した結果、「ヤングケアラー自身の可能性の尊重」「ヤングケアラーの孤立防止」「ヤングケアラーの居場所の確保」「ヤングケアラーがいつでも相談できる環境づくり」「家族状況の理解」「多様な社会資源の活用」「多職種・多機関との連携によるチームアプローチ」の 7 つが共通している視点として確認された。このようなことから、介護支援専門員のケアマネジメント実践は、ヤングケアラーである子どもがサポートしてくれる誰かとつながり続けながら、自分の将来に目を向けて子どもが子どもらしくいられる地域づくりに寄与できるのではないかと考えられる。今後は本研究の結果をもとに、若者ケアラーも含めた切れ目のない支援を展開できるケアマネジメント実践についてさらに検討を進めていきたい。

研究成果発表状況	雑誌論文、学会発表、図書、新聞掲載、作成 Web ページ、特許権等の出願・取得状況		
	第 20 回日本高齢者虐待防止学会（9 月）にて発表予定である。		
経費の執行状況	区　分	執行額(円)	備　考
	物品費	196.237	ケアラー支援ツール活用マニュアル印刷費、ヒアリング会場費、プリンタートナー等
	旅費	10,023	ヒアリング交通費
	謝金	90,000	ヒアリング協力者謝礼金
	その他	3,740	振込手数料等

令和 6 年 4 月 17 日

公益財団法人富山第一銀行奨学財団
理事長　横田　格　殿

助成研究成果概要報告書

教育機関名　：富山国際大学		助成金額　：　300 千円
研究代表者　：岩崎　直哉	所属　：子ども育成学部	職位　：講師
研究題目　：文学の読みの授業における「語り」の概念の獲得		

研究概要

小学校低学年では、物語の世界に入り込む「参加者的スタンス」の読みが優位であり、高学年では物語を外側から眺める「見物人的スタンス」の読みが優位になることが、先行研究により示唆されている。つまり、中学年はその過渡期にあたると考えられるが、この時期に学習者の文学の読み方はどのような質的な変化を果たすのだろうか。本研究では、「語り」概念の獲得に焦点を当てて、それを考察する。

この度改訂された小学校国語科教科書（令和 6 年度版）には、共通して「語り手」という学習用語が 3 年下巻「モチモチの木」の単元において初出される（全 3 社）。小学校学習指導要領には、「語り手」あるいは「語り」という用語の明記は未だに見当たらないものの（高等学校学習指導要領には明記される）、語り手・語りを意識して読むことの重要性は言を俟たない。中学年段階の前半期である小学校 3 年の授業における学習者の反応を分析することで「語り」概念の獲得について考察する。

成果要約

研究協力学級（小学校 3 年）において、物語を読む授業を 1 年間（3 単元：全 22 時間）にわたり参観させていただき、データを収集した。

○　参観時期：2023．6.1-6.13　　（全 6 時間）　単元名：「まいごのかぎ」
○　参観時期：2023．10.12-10.26（全 9 時間）　単元名：「ちいちゃんのかげおくり」
○　参観時期：2024．2.15-3.6　　（全 7 時間）　単元名：「モチモチの木」

授業ビデオ、学習者の声を収録した音声データ、また学習者のノートやワークシートの記述から学びの過程を分析した。「参加者的スタンス」を優位に読み進める学習者、「参加者的スタンス」を優位に読み進める学習者が混在していたが、それぞれの読みが交流されることで、学習者の読み方が更新される過程を見ることができた。また、「語り手」という用語が指導される以前から、語り手の存在を強く意識している学習者が一定数いて、そのような読みの経験をもとに「語り」概念を漸次的に獲得していくことが示唆された。本研究で得られた知見は、文学を読むことの学習とりわけ中学年の学習指導の在り方に指針を与え得るものなる。

研究成果発表状況	雑誌論文、学会発表、図書、新聞掲載、作成 Web ページ、特許権等の出願・取得状況		
	【学会発表】　2024.1.6　国語科学習デザイン学会（東京大会）にて発表 「学習者の「語り」概念獲得に関する考察　―小学 3 年「ちいちゃんのかげおくり」の実践を事例に―」 【学会発表】　同学会誌に投稿（査読中）		
経費の執行状況	区　分	執行額(円)	備　考
	物品費	99,598	タブレット、スタンド、ワイヤレスピンマイク
	旅費	200,402	学会参加費・研究会参加費
	計	300,000	